平成八年三月一日発行（毎月一日一回発行）

# 經濟論叢

第157巻　第3号

哀　辞

故島恭彦名誉教授遺影および略歴

金融的ヒエラルキーと過剰金融……本山美彦　1

寡占市場における組合化の効果：
　産業別 vs 企業別組合……石黒真吾　20

中小企業の存立・成長と研究開発……蘇　顯揚　33

芸術支援政策の財政問題（1）……金武　創　51

**追憶文**

島恭彦先生の業績を偲ぶ……宮本憲一　67

弔辞……廣田司朗　71

島ゼミナールの思い出……横田　茂　73

平成8年3月

京都大學經濟學會

経済論叢（京都大学）第157巻第3号，1996年3月

# 島ゼミナールの思い出

横　田　　茂

1965年の経済学部の卒業アルバムをひらくと，そこには30年前の島恭彦先生の姿があります。先生は，私たち11人の卒業生と一緒に，今はとりこわされてしまった赤レンガの旧研究棟の中庭に立っておられます。背後には先生の研究室の窓が写っています。この窓を通して，いつも規則正しく仕事をなさっておられた先生の横顔がみえたものでした。私たちは学生服を着ています。この写真を撮ったのは東京オリンピックがひらかれた1964年の秋でしたが，あの頃は学生の生活スタイルが今のようなものに変わり始めたとはいえ，改まった時と場所では，学生服を着用するのがまだ自然であったのです。その写真に添えて，先生はペンで卒業生へおくる次のような言葉を書いておられます。「高度成長の讃美歌が合唱されていた時でも，『資本の蓄積と貧困の蓄積は同時に進む』という至極平凡な経済法則が貫徹していた。1964年12月24日」

私たちが島先生のゼミナールで学んだ1960年代の前半は，高度経済成長のなかにあり，日本社会の様相が急速に変わっていく時代でした。論壇では，その少し前から「資本主義変貌論」が流行のテーマとなっていました。「国家の経済的役割」の問題は，このテーマにおける中心点の一つでしたが，先生は『現代の国家と財政の理論』（三一書房刊）や『財政学概論』（岩波書店刊）をはじめとして活発な著作活動をすすめておられました。また大学の外にあっても，1963年に創設された自治体問題研究所の副理事長として，忙しく仕事をなさっておられたことと思われます。しかし演習教室における先生は，少しも動的ではなくて，いつも黙って私たちの報告をきいておられました。ゼミナールでは，地域開発やインフレーションなど主に日本経済をめぐるトピックスが取上げられました。私たちの議論が一段落すると先生は初めて口を開かれるのですが，いつも簡潔に一言か二言，ある本質的な命題を発言されるだけです。私たちは，その意味がよく理解できず，教室には一瞬，沈黙が支配するのでした。しかし誰かがあれこれの既成の理論を借りて他を批判したりすると，先生はすぐに口を開かれ，「あらかじめ議論の枠を作るのはよくない。大切なのは現実がどのようになっているかということなので

す」と言われました。

今ふりかえると，あの教室での日々，先生は，日本経済の生々とした現実を素材として，私たちがそれぞれ自分の頭である本質的なものを理解することを期待しておられたのでしょう。しかし，先生はそのことを細ごまと説明したり，また学生を無理にご自分の考えの方へ引きずっていくようなことはなさいませんでした。

卒業アルバムのなかの島先生は，私たちがゼミナールの自由な議論を通して学んでいた大切なことを，先生らしく簡潔にさりげなく教えてドさっているように思われます。